愛知教育大学研究報告，39（人文科学編），pp. 47～58，February, 1990

ホーソーンとアメリカ・インディアン

中 村 正 廣
Masahiro NAKAMURA
（外国語教室）

1822年ガーディナー（W.H. Gardiner）は当時スコットの歴史ロマンスの影響下にあったアメリカ文学の追求すべき歴史的要素として，植民地時代，インディアン戦争，独立革命の三つを挙げている。[1] このような文学風潮の中で多少の影響を受けつつも当時の標語である過去の歴史の理想化に懐疑的だったホーソーンが，この三大要素の中で意識的に避けたのがインディアン戦争であった。ホーソーンによれば，インディアン同士の戦争は「これまで血が流された戦いの中で最も下劣なもの」であり，白人とインディアンとの戦争に至っては，「余りに運命的側面が強く，罪や同情といった考えを排除してしまう戦い」[2] とさえ言い切り，描写の必要性を感じないとしている。ホーソーンにとってインディアンが白人に滅ぼされるのは歴史的に避けられない運命であり，インディアンは「既に滅びた種族」（XI，51）でしかない。ホイッティア（J.G. Whittier）の *The Supernaturalism of New England* を書評して，ホーソーンは「野生の国の伝説」に見られるような「暗く雄大なもの」がアメリカにないことを嘆きつつも，「最初の移民の森の生活や彼らのインディアンとの交渉は，彼らが英国から持ち込んだ神話に何も新しく植え付けるものはなかった」[3] とコメントすることも忘れない。ピューリタンの国ニュー・イングランドを「新世界に植えられた小さな旧世界」と見るホーソーンは，新大陸の特異性を否定しようとするジョン・ウィンスロップと変わらないとも言えるのだ。[4] 事実 *The Scarlet Letter* や "Young Goodman Brown" の森は，"The Prophetic Pictures" の芸術家が絶望してペンを投げ捨てたアメリカの大自然ではなく，また "My Visit to Niagara" で語りが述べている，全ての先入観を脱ぎ捨てた後に味わうロマン主義的な自然でもなく，ヘスタ・プリンやブラウンがさ迷う道徳的荒野であり，マシーセン（F.O. Matthiessen）が指摘するようにスペンサーの「過ちの森」の焼き直しとも言える。[5] 更にホーソーンは，"The Prophetic Pictures" の芸術家が関心を向けた「インディアンの酋長の厳然とした威厳，褐色のインディアン女性の美しさ，インディアンの小屋の中の家庭生活，忍び足の行軍，暗い松の森での戦闘」（IX，178）をも描写の対象にすることもない。インディアンに連れ去られた白人の記事を貪り読んだホーソーンも，その関心は連れ去られた白人や残された家族に向けられ，インディアンは関心の外にある。逆に，インディアンが関係した伝説や歴史を英国本国と植民地の対立に変貌させた作品，例えば "The Gray Champion" や "The May-Pole of Merry Mount" なども考え合わせると，インディアンはホーソーンの関心を殆

ど喚起することはなかったと見ることも不可能ではない。[6]

ホーソーン文学の中に於けるインディアンの位置づけは，インディアンは「英国人植民者との関わりの限りに於いて」（VI，42）関心を喚起したという Grandfather の言葉にはっきりと表れている。事実フランス軍と連携して英国植民地を悩ました神に祈るインディアンについて，そしてまた英国人植民者を虐殺し女性や子供を捕虜にする獰猛なインディアンについて，ホーソーンは度々言及している。ところが逆に，*Grandfather's Chair* やホーソーンが編集した雑誌 *The American Magazine of Useful and Entertaining Knowledge, Peter Parley's Universal History* 等に現れるインディアンに対する同情的描写を除いて，歴史上ピューリタンがインディアンに尽くした悪業の限りが詳細に描かれている作品は皆無に近い。"Roger Malvin's Burial", "Young Goodman Brown", "The Gray Champion", "Main-Street" 等で暗示するだけにとどまっているだけだが，しかし，ピューリタンの歴史に関心を示したホーソーンのインディアンに関する知識は非常に深いものがあったことははっきりしている。ケッセルリング（Marion L. Kesserling）の *Hawthorne's Reading* によれば，セイラム図書館からホーソーン及びメアリ・マニング（Mary Manning）の名で借り出されたインディアン関係の書物は，*Collections of Massachusetts Historical Society* などシリーズもの以外にも，記録に残っているだけで5，6冊あり，これにニュー・イングランド関係の書物を加えれば，ホーソーンがインディアンに関して得た情報は膨大なものであったと考えられる。ピューリタンの行動に神の特別な摂理を見たコトン・マザー（Cotton Mather: 貸出し1827年，1828年，以下借り出した年のみ挙げる）は勿論のこと，マサチューセッツ湾植民地官選の歴史家かつインクリース・マザー（Increase Mather）のライバルとも言うべき聖職者であり，当然の如くピューリタンの行動に特別な摂理を見，インディアンを血に飢えた殺人者としながら，その偏見をトーンダウンしてインディアンを森の自由を愛する勇蒙果敢な種族と不承不承ながら認めたウィリアム・ハバード（William Hubbard: 1827年），インディアンの残忍さを指摘しながらも高貴な野蛮人としての特徴を認めた牧師ジェラミィ・ベルナップ（Jeremy Belknap: 1827年），敵には残虐であるという指摘はしながらも白人文明との接触によって堕落する以前の簾潔なインディアン像を強調したモラヴィア教徒ジョン・ヘケヴェルダー（John Heckewelder: 1828年）もホーソーンは借り出している。[7] つまり，ホーソーンはソロウ（Henry D. Thoreau）以外にもインディアンの美点について教えてくれる先達を早くから持っていたのだ。更には王党派の一人としてホーソーンの作品にも登場する歴史家トーマス・ハッチンソン（Thomas Hutchinson: 1826年，1829年）をホーソーンが読んでいる事実も注目に価する。というのも，ホーソーンによってバンクロフトの才気と哲学を持たぬとされたこの歴史家は，このマイナスの面を除けば「恐らく詳細で正確であらゆる必要な目的に使える……知識」[8] を提供してくれるからだ。ボストンの大火で焼けたマサチューセッツ湾植民地の歴史資料を保存すべく *The History of the Colony and Province of Massachusetts-Bay* を書き始めたハッチンソンは，ホーソーンに言わせれば「少なくとも正確な」（VI，138）歴史家であり，加えてある程度「彼の著作のトーンは彼がアメリカの愛国主義に深く染まっていたことを証明している」[9] のである。この愛国主義的であるとともに正確なハッチンソンの書物には，例えばインディアンが戦いに於いて敵を全滅させるヨーロッパ人方式の残忍さを学んだと云われるピークォット戦争，メタコムの気高さを

認めたキング・フィリップ戦争，頭皮狩り目当てのラヴェルの戦い，東部インディアンの数を激減させた天然痘，アン・ハッチンソン問題，ジョン・エリオット，土地問題，英国植民地側の一方的条約破棄行為等から，ニュー・イングランド・インディアンの勢力図，生活，宗教，一般的な性格（インディアンの残忍，不潔にまで言及している）に至るまで，植民地時代の白人歴史家という拘束された条件のもとでかなり公平なインディアン情報が幅広く網羅されており，他のもろもろのソースとともにホーソーンのインディアン観に大きく寄与したと思われる。インディアンは生き残るには少なくとも西洋化すべきであったとする現代の歴史家オールデン・ヴォーン（Alden T. Vaughan）は，ピューリタンがインディアンに対して如何に人間的で公正な立場を取ったかを主張しているが，[10]「いわゆる野蛮人の生活をその枠内で改善する」（XIII，257）のを認めないピューリタンの「正義のトマホーク」（"Tomahawk of Righteousness," XIII，207，400）はピューリタンによる西洋化の過程の残酷さを充分に示唆しており，後述するように白人の自己中心的な西洋化の概念自体ホーソーンの懐疑の対象となった。インディアンを「精神と感情と永遠の魂をもつと認めた」（VI，43）唯一の人ジョン・エリオットですら，ホーソーンはその高慢さを指摘せざるを得ず，[11]またレズリー・フィードラー（Leslie Fiedler）によれば後にインディアン絶滅論を正当化する神話となるハナ・ダストンによるインディアン殺戮もホーソーンにとっては非難の対象でしかない。[12]ホーソーンが数頁に亙って描写したこの事件について，ホーソーンの姉エリザベスは，全く女性らしからぬダストンの振る舞いに反発を覚えたホーソーンがインディアンに共感を示しているとして次のように述べている。

> Mrs Dustan when she escaped killed as many of her Captors as she could, boys among others, which seemed unfeminine to my brother. It was told in a very entertaining manner, and the narrative ought not to be lost; indeed all that he wrote for the Magazine did him great credit, evincing not only much miscellaneous information, but a power of adapting himself to the minds of others whose culture and pursuits were unlike his own.[13]

しかし，インディアンは単にその「文化と日々の勤め」がホーソーンのものとは全く違った，他者としての知的対象物としてだけ機能しているわけではない。ホーソーンのインディアンに対する関心は，歴史の単なる一構成要素に対する知的好奇心以上のものがある。残酷で本能的な動物的存在として，ホーソーンはインディアンを nigger（ホーソーンはよくこの言葉を用いる）と同一次元で扱う一方で，目，髪，膚，顔つきといった独特のものが黒人の場合と比べて「混血によってなかなか消えない」（XIII，266）インディアンは，黒人とは全く対照的な，非常に特異な特色をもつ存在としてホーソーンの注目を浴びている。奴隷としての存在が似つかわしいとさえホーソーンが暗示する黒人と違い，[14]インディアンは白人文明との接触によって「荒野の王の持つ物腰，野生的美徳と洗練されていない力強さのある精神」は失ったものの，「不自然なお決まりの生活に従わせることはできない」（IX，365）存在なのだ。インディアンの血の入った馬丁を雇ったことのあるホーソーンは，現実のインディアンを幾度も目にし，様々な生理的反応を見せていると同時に，白人のインディアンへの共感の欠如を幾度となく嘆いている。例えば，1837年 *The Amer-*

ican Notebooks の中でインディアンは碑を建てることをしなかったために，その歴史は「伝説，作り事」に見え，インディアン自身は「ぼんやりとした幻影」（ VIII ， 169）に見えると述べたホーソーンは，二年前の1835年 "Sketches from Memory" の中で次のように語る。

> It has often been a matter of regret to me, that I was shut out from the most peculiar field of American fiction, by an inability to see any romance, or grandeur, or beauty in the Indian character, at least, till such traits were pointed out by others. I do abhor an Indian story. Yet no writer can be more secure of a permanent place in our literature, than the biographer of the Indian chiefs. His subject, as referring to tribes which have mostly vanished from the earth, gives him a right to be placed on a classic shelf, apart from the merits which will sustain him there. (X, 428-9)

インディアン酋長に関する書物をセイラム図書館から借り出し，[15] 幼くしてインディアン伝説に興味を抱き，[16] そして "The Great Carbuncle" などインディアン伝説に物語の素材を求めたホーソーンが，インディアンの物語を完全に忌み嫌うはずがないことは明らかで，ここは文体感染（stylistic contagion）と見た方が良いと思われる。事実，引用の直前でホーソーンは「この今は亡き種族の習慣と感情は今の者たちとは違い過ぎて彼らは余り共感できなかった」（X，428）と述べている。更に1844年になると，ホーソーンはソロウなどの影響もあってロマンチックになり，"A Book of Autographs" ではインディアンの「未発達の段階の，しかもじっとして動かない生活の手段」を知れば，インディアンは「幻影のような，非現実的な」（ XI ， 371）存在ではなくなり，白人の共感も得られると主張している。

未発達の段階にある生活様式を持つインディアンは，「うるさい形式や厳格なしきたり」（X, 21）を捨て去り，「すべての慣習や慣例，人間同士の足かせからの自由」（X, 25）を持っている。役に立たず，ぶらぶらしていて，放浪するインディアンは，「煙と埃にまみれた大都市の中ではものぐさな存在」（ IX ， 364）であるものの，原始的本能に満ちあふれ，日々新たな目的，新たな仲間を持つという興奮によって青春の衝動を持ち続ける自由な精神，素晴らしい放浪者の代表的な存在なのだ。クーパー（James Fenimore Cooper）の作品で白人から否定的意味で放浪者（vagabond）と呼ばれるインディアンも，ホーソーンにとっては放浪者の代名詞ジプシーよりも放浪者たるにふさわしい存在に見えるのであり，[17] 自由な精神を享有する放浪者に対するホーソーンのロマンチックな姿勢が窺える。更にインディアンの呪い師，ひいてはインディアン全体に付与されてきた悪魔的イメージは，悪魔的占い師としてのジプシーの側面をも十分にカバーしている。以上のようなインディアンの自由の放浪者的側面，悪魔的側面，更にソロウのインディアン的生活に見られる「生活の糧を一貫して求める努力の欠如」（ VIII ， 354）を考慮すれば，「七人の放浪者」の一人として「自由な精神，解放された精神，とりわけ楽しんでいる最中に惨めな気持ちにさせることのある放浪の衝動」（ IX ， 365）を若き小説家の「私」が主張するとき，ホーソーンは祖先のピューリタンによって役に立たぬと非難される小説家，人間の神聖な心を

洞察する悪魔的芸術家としての意識をインディアン的特性の中に投射しているとも言える。[18]

インディアン的生活に共感を示すホーソーンは，“Main-Street”の中でインディアンと荒野の消滅はセイラムの歴史に於いて不可避のものであったことを示唆しながら，白人入植者の代表ロジャー・コナントを次のように描写している。

> His stalwart figure, clad in a leathern jerkin and breeches of the same, strides sturdily onward, with such an air of physical force and energy, that we might almost expect the very trees to stand aside, and give him room to pass.（XI，52-53）

“Roger Malvin's Burial”の序文をアイロニカルに読む最近の批評に疑問を投げかけたディヴィド・レヴィン（David Levin）は，新世界にエデンの園を夢見るコナントをホーソーンが高く評価しているとするが，[19] 他方に於いてこの箇所は *The House of the Seven Gables* のピンチョン判事を確実に想起させる。土地所有の概念を持たずただ慣習的な使用権の伝統にだけ束縛されてきたインディアンが，白人の行為をただ眺め驚愕するばかりの様子が対照的に浮かび上がる結果になっている。*The House of the Seven Gables* はマシュー・モールの土地をピンチョン大佐が掠奪し，逆にモール側がメイン州の広大な土地を主張できるピンチョン所有のインディアン権利証書を隠すことに始まるが，しかし，無垢に処女地を開墾するモールにしても，インディアン権利証書よりも「自分の不屈の労働によって自然の野生の手から強奪した」（II，19）事実を尊重する白人の自己中心的な土地所有の概念を象徴していると言える。[20] このような白人がインディアンに対して持った勢力を「勝ち得る運命にある」（XI，51）とし，「メインストリートの舗道はインディアンの墓の上にできるのだ」（XI，55）とする一方で，ホーソーンは只の酔漢に成り下がってしまった偉大なる女酋長の孫の運命に哀愁を感じざるを得ない。“A Rill from the Town-Pump”では単に「運命的に酒が押し寄せた」（IX，144）としており，インディアンの飲酒癖がインディアン自身のせいか白人のせいかはっきりさせていないが，*The Scarlet Letter* では「白人の酒がインディアンを放縦にさせた」（I，49）となっており，また *Elixir of Life* では矯正の見込みのない程怠惰で役立たずのインディアンの飲酒癖は，白人との接触によって「埋め合わせとなる長所」（XIII，263）が消滅させられたせいとされる。以上のように考えてみると，「永遠なる青春と神神しいまでの樹令を待つ」（XI，50）原始的荒野とインディアンの消滅が不可避なものかと疑問を投げかけたホーソーンが，興行師を批判する紳士に口をはさませることによってこの疑問に答えるのを意識的に避けているのは，ただ運命として割り切ることができぬ思いをホーソーンが抱いているからなのだ。

いや，単なる哀愁だけに終わっていないところにホーソーンのインディアンに対する関心の高さが窺えるのである。歴史から排除される側に立つインディアンの威厳ある代表として，ホーソーンは国家と宗教について二番目の夫と語る女酋長を“Main-Street”に導入しているが，このインディアン女性の威厳と女王らしさがやがて拡大され，ヘスタらホーソーンの作品に現れる黒髪の女性と関連づけられている事実は注目に価する。いわゆる黒髪の女性は旧世界の罪を背負ったイメージで捉えられるが，新世界の荒野の住人イン

ディアンと関係づけられるべき点が多々あるように思われる。アーリン・ターナー（Arlin Turner）は緋文字のソースとしてインディアンとの関連，即ちホーソーンが読んだジョンダントン（John Dunton）の影響を指摘しているが，[21] ホーソーンは更に深い意味でインディアンと関連づけている。イロコイ族を初めとしてインディアン女性の地位は白人女性のそれよりも高かったことは周知の通りだが，アルゴンキアン語族に属するニュー・イングランド・インディアンは，母系社会で母方居住制，即ち男の方が妻の所帯に移り住むタイプの社会であり，世襲制であった酋長の地位を女性が握ることもあったことが知られている。[22] 酋長の部族に対する支配力は白人が当初想像した程強力なものではなかったにしろ，セイラムの歴史を描いた“Main-Street”の中のインディアン女性は少なくとも部族の長に立つ女性として描写されており，男性中心のピューリタン社会と対峙しているのである。またインディアン女性と言えば *Elixir of Life* のキザイア，及びナショーバの「粗野，とげとげしさ，放らつさ」（XIII，267）を思い出すが，二人の薬草に対する知識を除けば，ホーソーンによればこれは女性一般の，それもオールドミスの特色であって，この二人の甥にあたるセプティミウスはインディアン的側面を多く残した主人公だが，どこか無造作に着ていても人を引き付けるところがあるとされる。“The Prophetic Pictures”の「褐色のインディアン女性の美しさ」に繋がるものが“Main-Street”のインディアン女性にはあるのだ。それはともかく，“Mrs. Hutchinson”というホーソーンの初期の作品では，社会の安全への危険人物とされたハッチンソンが，ヘスタという非常に威厳に満ちた，自然を背景に持つアメリカ的な人物として変貌したのは，ホーソーン自身が抱くインディアン像を巧く駆使したからとも言える。次の引用ではホーソーンは鮮明にヘスタをインディアンに譬えている。

> She had wandered, without rule or guidance, in a moral wilderness; as vast, as intricate and shadowy, as the untamed forest, amid the gloom of which they were now holding a colloquy that was to decide their fate. Her intellect and heart had their home, as it were, in desert places, where she roamed as freely as the wild Indian in his woods. For years past she had looked from this estranged point of view at human institutions, and whatever priests or legislators had established; criticizing all with hardly more reverence than the Indian would feel for the clerical band, the judicial robe, the pillory, the gallows, the fireside, or the church.（I，199）

これまで述べてきたインディアン的特色が，“untamed”“roamed as freely”“estranged”などといった社会制度の批判や暖炉の否定に集約されている。ヘスタを排斥する文明社会の黒い花と対峙する野生のバラは厳しい荒野から生まれ，ヘスタの野生的性格は「彼女を非難する律法とは無縁な習慣と生活を送る種族に同化でき」（I，79），ヘスタがさ迷う森は「決して人間の律法によって隷属させることはできない，あの野生の未開の自然の森」（I，203）なのである。そして何よりも生気あふれたヘスタとインディアンの永遠の青春は厳しく冷たく幽閉されたピューリタン社会とは明確な対照をなしている。ディムズディル，チリングワースの二人の男性が死に，ヘスタが生き残りパールによっていわゆる女性

の家系が続けられていくという結末も，ニュー・イングランド・インディアンのライフサイクルを思わせ興味深い。

異端者，社会の秩序の錯乱者＝インディアンというピューリタン的図式は，“The May-Pole of Merry Mount” の歴史的背景に潜むピューリタンとトーマス・モートンの衝突に鮮明に辿ることができる。インディアンへの銃と酒の販売，インディアンのカヌーを盗んだ罪といったインディアンに絡ませた罪で三回に亙ってピューリタンがモートンを捕らえたのは，抑制の効かない野獣としてのインディアンだけが持つ筈の放埒な属性を白人が持ちうることに危惧を覚えたからだが，*The Scarlet Lettr* の第二章「広場」においても，牢獄から引き出されんとするヘスタを予示するものとして，クェーカー，反律法主義者など宗教的異端者や魔女と肩を並べて怠惰で放浪するインディアンが挙げられている。罪意識に懊悩し肉体の欲望を消し去らんとするディムズディルは，インディアンに密かに襲われる砦のイメージで描かれるが，これも放蕩のインディアンもしくは堕落に引きずり込むものとしてピューリタンが恐れた女性の性とピューリタンとの対峙衝突という全体の構成に沿って巧く機能しているイメージと言える。

ホーソーンは「ピューリタン社会の土台を揺がす」（I，165）ヘスタをハッチンソンと同次元のものとしてみなしているが，ピューリタン植民地の歴史の上でもハッチンソンとインディアンは深く結びついている。アン・ハッチンソンが絡んだ反律法主義論争はピューリタンの女性に対する激しい偏見と関係があったことは周知の通りで，ハッチンソンら女性がウィンスロップらの攻撃を受けたのは偏に誘惑者を生み育てるものとしての女性が宗教に関係しているという理由からであった。アン・キビィ（Ann Kibbey）によればこのハッチンソン問題は時期を前後したピークォット戦争（1637）と大きく関わっていた。[23] 彼女はインディアンとハッチンソンがピューリタン植民地にとって同次元の脅威として受け取られていたことをピューリタンの残した資料のレトリックをもとに展開している。ピューリタンは信仰の欠如が女性の身体を通して肉体的に表現されると考え，このような怪物を産む女性を破壊することは，ピューリタンにとってピークォット族の脅威的勢力を破壊することと同一のものであった。

アンの子孫のトーマス・ハッチンソンが書いた歴史書等ではこの二つの事件が交互に言及され，ホーソーンがその相関関係を察知していたことは明らかで，事実ホーソーンは若くしてこのピューリタン的思考をフィクション化している。例えば，“Mrs. Hutchinson” の中で，ピューリタンが危険を察知してハッチンソン派を武装解除した事実，及びアン・ハッチンソンの死産の子が如何に奇形の状態にあったかを記録することに熱心であったウィンスロップに言及したホーソーンは，彼女が血に飢えたインディアンに殺され，ただ一人生き残った彼女の娘がインディアンとして育てられたことをピューリタンが彼女の運命の当然の帰結としたとも述べている。女性作家へのホーソーン自身の反発とも相俟って，ハッチンソンの才能と情熱は社会の安全を揺がすものとして否定的に描かれており，ここでは女性とインディアンはピューリタンの思考のレベルでしか捉えられていない。ところが，“Endicott and the Red Cross”（この物語はピークォット戦争と反律法主義論争が起きた1637年以前の設定になっている）では，放蕩の福音伝道者，彼をそのように誘惑した女性，そして Adulteress よりむしろ Admirable を意味しているように思われるAという文字を胸につけた美しい若い女性を前に，ジョン・エンディコットは「この哀れむべ

き異端者に，我々が巨大な力を持った人間のように武器を使えることを見せてやろう」（IX，436）と豪語するが，これを見ている群衆の中には，今やピューリタンの武力の前に「無害」（IX，436）にされた原始的インディアンの威厳を持った堂々とした野蛮人がいるのである。16歳から60歳までの町の全ての男性が市民軍隊の一員として象徴的に対峙している相手はインディアンであり，異端者としての女性なのだ。この女性＝インディアンというピューリタン的概念にホーソーンのインディアンに対する好意的姿勢がプラスアルファされており，作品全体がホーソーンのピューリタンと女性に対するアンビバレントな姿勢を増幅する結果となっている。

ホーソーンのアンビバレントな女性観は“Main-Street”，*The Scarlet Letter* 等を経て，やがて黒髪の女性と金髪の女性という二極分化した伝統的な女性観を発展させる形を取る。[24] そこでは女性とインディアンの類似や比喩は目立って多くはないものの，例えば，*The Blithedale Romance* では女王然とした美貌のフェミニスト作家ゼノビアは「全ての人間の制度を平気で破壊する」（Ⅲ，44） 女性であって，「男性の粗野な考え」（Ⅲ，47）が求める無邪気さとは程遠い女性だが，「雑草に満ちた心」（Ⅲ，44） から生まれるその仕草と表情は自由で自然であり，彼女が頭につけている温室育ちの異国の花も強烈な臭いを放っている土壌で自然が創造した珠玉なのだ。これとは対照的にベールをつけた女性としてウェスタヴェルトの催眠術の見せ物になったプリシラは霊的存在として登場するが，自由を剥奪された女性であり，その処女的純潔はゼノビアの肉感的な特色と対峙している。加えて男性的エゴティズムを見せるホリングズワースは聖なるインディアン伝道師ジョン・エリオットに譬えられ，二人をエリオットの説教壇で感動させるのである。*The Marble Faun* ではインディアンのイメージで描かれる女性像は更に影を潜めるが，素性が霧に包まれた暗い性的誘惑者であるミリアムが登場し，シセラのこめかみに天幕の釘を打ち込んでいるヤエルやホロフェルネスの寝首をかいたユデトなど，男性に対して血なまぐさい復讐的危害を加えている女性のスケッチを数多く描いている。ミリアムはこのユダヤ人女性たちに野卑な殺人者としての様子や自責の念を与えて男性に対する復讐の効果を弱めているが，これより幸せな普通の生活のスケッチに於いても，ミリアムと思われる人物が「二人の恋人が座っている灌木の枝の間から覗き見しているかと思えば，新しい暖炉端に若い夫婦が座っている様子を家の外から霜で覆われた窓越しに眺めたり，また六頭の馬を華麗に得意げに操りながらチャリオットから体を乗り出し田舎家の戸口のつましい楽しみを熱心に見つめている」（IV，46）のだ。つまり，ミリアムは男性社会に敵意を以て対峙し，残虐性と放浪癖があり，つましい家庭や暖炉の外に位置する存在なのである。加えてミリアムの目はドナテロに殺人を命じるというような魔法をかける能力がある。一方ヒルダは「現在の因習の束縛」（IV，55）からの自由を持つ芸術家でありながらオリジナルな追求を諦めてコピーイストに執着する道を選択しており，厳しく罪を咎めて純潔を求めてやまないピューリタン的なところが多分に見られる。

以上のようにホーソーンはその作品に於いて黒髪の女性とインディアンとの類似を意識的に描写しているが，しかし，社会の倫理を受け入れる無垢な金髪の女性は幸せな結末を迎えるものの，黒髪の女性は明るい未来からは排除されるのである。結局のところ，ホーソーンは *The Scarlet Lettr* の結末に於いてヘスタのロマンチックな思考に否を発し，抑制されない自然よりは暖炉の火と他の人間との同胞感を選択することになる。如何に日

日の生活から足かせを解いてくれる自由であれ，ホーソーンにとってはホームあってのものであり，人間社会の組織の「全ての不自然と因習はただ実体のない皮相にすぎず，その下に横たわる深奥がそのためにそれだけ悪いというわけではない」（X, 25）のだ。酒を飲み，放浪するインディアンの姿はホーソーンに放縦なアイルランド人を思い出させ，[25] そのさ迷える姿は悪魔的なユダヤ人を浮かび上がらせ，[26] ホーソーンの全幅の共感を得られないことは明らかだ。数ある超絶主義者の中で唯一評価できたソロウにしても，そのインディアン的なところはホーソーンを魅了すると同時に嫌悪させたことは明らかであり，ロングフェロウ（Henry W. Longfellow）の *The Song of Hiawatha* についてホーソーンはそれなりの評価をしながらも，「実験的素材」それも「疑わしいもの」（XVII, 402）と付け加えざるを得ない。またヘケヴェルダー的インディアン像を謳うクーパーについて，1843年 *Pioneer* 誌に発表された "The Hall of Fantasy"（*Mosses from an Old Manse* では以下の部分は削除されている）の中で，「クーパー氏は更に地味な形で現れており，彼を魔法の館で主要な作家にした物語の場面よりも寧ろ文書誹毀訴訟での原稿を練っているかの様に瞑想している」（X, 636）とホーソーンは注釈している。ホーソーンの多くの作品に現れるインディアンは残虐で血に飢えた野獣であり，ホーソーンが現実に目にするインディアンの目が冷酷な感情を湛えていたことを彼は幾度となく繰り返している。しかしながら今まで述べてきたように，このような残虐非道のインディアン像の対極に於いて，ホーソーンが自由と青春の衝動を持ち続けるインディアン像を抱いていることも事実なのである。そしてホーソーンは当時のアメリカ白人のように愚鈍で残虐なインディアン像と超然とした高貴な野蛮人としてのインディアン像との間でただ漫然と揺れ動いていたわけでもない。若くしてホーソーン文学の中枢に位置するアンビバレントな女性観，芸術家像にまでインディアンを絡ませたホーソーンは，機会ある毎にインディアンに関心を向け，更には未完の作品群 *Elixir of Life* に於いて，混血自体は当時忌み嫌われていたと指摘しながら，歴史の一構成要素としての機能の範囲を越えたインディアン混血児を作品の主人公に据える試みまで企てており，その意味では終生インディアンはホーソーンを捉えて離さず，その知的生理的共感を喚起したと言えるのである。

（本稿は1989年5月29日ホーソーン協会第8回全国大会で発表したものを加筆修正したものである。）

（平成元年9月13日受理）

註

1 Neal Frank Doubleday, "Hawthorne and Literary Nationalism," *American Literature*, 12（1941）, 448に引用。

2 *The Elixir of Life Manuscripts*, Vol. XIII of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, ed. William Charvat *et al.* (Columbus: Ohio State University Press, 1977), p. 260. 以下ホーソーンの作品に関する引用は特に記さない限りこの全集に依り，巻数，頁数を括弧に入れて示す。

3 Randall Stewart "Two Uncollected Reviews by Hawthorne," *New England Quarterly*, 9（1936）, 505-507.

4 "Sir William Phips," *Tales and Sketches* (New York: Library of America, 1982), p. 12で "Each settlement of the Pilgrims was a little piece of the old world, inserted

into the new. . . ."とホーソーンは書いている。因に，John Winthrop はニュー・イングランドについて "for the country itself, I can discern little difference between it and our own"(*The History of New England from 1630 to 1649*, Boston, 1825, I, p. 375)と述べている。

5 F.O. Matthiessen, *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*(New York: Oxford University Press, 1941), pp. 279-280.

6 ホーソーンのインディアン観を詳しく論じたものとしては，Jason Almus Russell, "Hawthorne and the Romantic Indian," *Education,* 48 (1928), 381-386, Edwin Fussell, *Frontier: American Literature and the American West* (Princeton: Princeton University Press, 1965), pp. 69-131, Jean Normand, *Nathaniel Hawthorne: An Approach to an Analysis of Artistic Creation,* trans. Derek Coltman (Cleveland and London: The Press of Case Western Reserve University, 1970), p. 186 等が挙げられる。Russell はホーソーンのロマンチックなインディアン観，Fussell はホーソーンの西部への関心，Normand はホーソーンの否定的なインディアン像についてそれぞれ論述している。

7 William Hubbard 及び Jeremy Belknap のインディアン観については Harry M. Ward, "The Search for American Identity: Early Historians of New England," in Alden T. Vaughan and George A. Billias, eds., *Perspectives on Early American History* (New York: Harper & Row, Publishers, 1973), pp. 40-62 を参照した。

8 "Sir William Phips," *Tales and Sketches*, p. 12.

9 Arlin Turner, *Hawthorne as Editor: Selections from His Writings in The American Magazine of Useful and Entertaining Knowledge* (1941; rpt. Folcroft, PA.: The Folcroft Press, Inc.. 1969), p. 95

10 Alden T. Vaughan, *New England Frontier: Puritans and Indians, 1620-1675*(New York: W.W.Norton & Company, Inc., 1965), pp. 323-326. この Vaughan に真っ向から反対した歴史家は Francis Jennings である。Francis Jennings, *The Invasion of America: Indians, Colonialism, and the Cant of Conquest* (1975; rpt. New York: W.W. Norton & Company, Inc., 1976) を参照。

11 *Grandfather's Chair* (VI, 41-50) に描かれる Eliot 像には明白なアイロニーはないが，インディアン語による聖書が完成しない限りインディアンは永遠に無知の荒野をさ迷うことになると信じて疑わなかった Eliot に，ホーソーンが Grandfather のように諸手を挙げて共感を示したとは考えられない。*The Blithedale Romance* の中で「余りに強烈な男性的エゴティズム」(III, 123) を見せる攻撃的で動物的な Hollingsworth が「聖なるインディアン伝道師」(III, 119)に譬えられ，加えて Eliot's Pulpit で女性二人と語り手 Coverdale を感動させるという状況設定のアイロニーを考慮すれば Eliot の知的高慢の罪をホーソーンが暗示していることは明らかである。

12 Leslie Fiedler and Arthur Zeiger, ed., *O Brave New World* (Dell Publishing Co., 1968), pp. 51-55.

13 Randall Stewart, "Recollections of Hawthorne by His Sister Elizabeth," *American Literature,* 16 (1945), 328.

14 過激な社会改革に懐疑的であったホーソーンが黒人奴隷解放運動に消極的だったことは議論の余地はないが，黒人が奴隷の状態にあることに同情は示すものの余り疑問を呈さないところがホーソーンにはある。二つほど例を挙げておくと，例えば "Old News" の中で，早くからピューリタン植民地で奴隷として使われていた黒人は最悪の状況でも陽気であり続ける才能があり，白人の中にも奴隷の身の者がいることを黒人が知れば奴隷の運命に甘んじることができようとホーソーンは述べている。更におしゃれな東部の黒人よりも滑稽な奴隷タイプの黒人への好みをホーソーンが示していたことは *The American Notebooks, Centenary*, VIII, pp. 111-112, 151 などに窺え

る。後者の例，及び全般的な黒人問題については Allen Flint, "Hawthorne and the Slavery Crisis," *New England Quarterly*, 41 (1968), 393-408 を参照。

15 Kesserling によればホーソーンは1837年5月6日に Samuel Gardner Drake, *Indian Biography, containing the Lives of more than Two Hundred Indian Chiefs . . . their Most Celebrated Speeches, Memorable Sayings, Numerous Anecdotes, and a History of their Wars* を借り出している。

16 Samuel T. Pickard, *Hawthorne's First Diary* (1897; rpt. New York: Haskell House Publishers Ltd., 1972), pp. 74-76 を参照。因に，この日記がホーソーンによって書かれたものかどうかについては，Gloria C. Erlich, "Who Wrote Hawthorne's First Diary?" *The Nathaniel Hawthorne Journal* 1977 (Detroit: Bruccoli Clark Publishers, Inc., 1980), pp. 37-72 は否定的判断を下している。

17 "American Gipsies," Turner, ed., *Hawthorne as Editor*, p. 243 によれば，アメリカのジプシーはその特異性を喪失しており，インディアンの方が放浪者にふさわしいとされている。

18 Edwin Fussell はこのインディアンと作家との同一視がまさにソロウ的であると主張しているが，筆者には作家であることに否定的側面をも感じずにはいられないホーソーン特有の感情があるように思われる。Fussell, p. 78 を参照。

19 David Levin, "Modern Misjudgements of Racial Imperialism in Hawthorne and Parkman, " *Yearbook of English Studies*, 13 (1983), 145-158. 英国植民地とインディアンとの戦いの背後には英国とフランスとの北アメリカに於ける衝突があり，フランス軍に操られた形のインディアンに対する英国植民地の政策にホーソーンは理解を示したと Levin は主張している。

20 ホーソーンは歴然と Maule を批判していないが，Maule のエデン的な新鮮さが虚構のロマンスの中にしか存在できないのであれば，Maule 家の土地に対する要求は虚構のものでしかないと Brook Thomas は解釈する。Brook Thomas, *Cross-examinations of Law and Literature: Cooper, Hawthorne, Stowe, and Melville* (New York: Cambridge University Press, 1987), pp. 72-73 を参照。

21 Arlin Turner, *Nathaniel Hawthorne: An Introduction and Interpretation* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1961), p. 127. ホーソーンは1833年に John Dunton, *The Life and Errors of John Dunton*, 2 vols. を Salem Athenaeum から借り出しているが，Turner の指摘によれば，インディアンから背徳者の自由を教えられた女性が12箇月間右腕にインディアン風に裁った赤い布を着けさせられた事実がこの書物にある。

22 Nancy Oestreich Lurie, *North American Indian Lives* (Milwaukee Public Museum, 1985), p. 5, 及び Alden T. Vaughan, pp. 32-33 を参照。

23 Ann Kibbey, *The Interpretation of Material Shapes in Puritanism; A Study of Rhetoric, Prejudice, and Violence* (Cambridge: Cambridge University Press, 1986), pp. 92-120.

24 Nina Baym, "Nathaniel Hawthorne and His Mother: A Biographical Speculation," *American Literature*, 54 (1982), 1-27 は *The House of the Seven Gables* に於いては黒髪の女性の欠在そのものが深い意味を持ち，男性社会に於ける幸福と自由の完全なる喪失が表現されているとする。Baym は "Main-Street" の中の女酋長と Hester ら女性を結びつけて考えているが，この考え方は彼女の論文 "Hawthorne's Women: The Tyranny of Social Myths," *The Centennial Review*, 15 (1971), 250-272 にも見られる。

25 "Sketches from Memory" で仕事もせず酒ばかり飲んで放浪しているアイルランド人に言及したホーソーンは，1837年メイン州オーガスタに Horatio Bridge を訪ねた時，再び放縦なアイルランド人が掘っ建て小屋に居座り酒に溺れている様を目にし，それについて *The American Notebooks* の中で詳述している。特に男性が女性のみに重労働をさせて恥じない様はホーソーンのアイルランド人像を更に悪化させている。ところで，イロコイ族の女性の占める高い地位 (W.E.

ウォシュバーン／富田虎男訳『アメリカ・インディアン――その文化と歴史――』南雲堂，1977，48－50頁参照）にも拘らず，インディアン女性の苛酷な労働が当時流布しており，ホーソーンもこの点に関しては微妙な姿勢を持っていたと思われる。著者の知る限りではホーソーンはこのことに触れていないが，インディアン女性の苛酷な労役についてホーソーンが，例えば，Hutchinson, *The History of the Colony and Province of Massachusetts-Bay* ed. Lawrence Shaw Mayo (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1936), pp. 388-389 で知っていた可能性は否定できない。

26　ホーソーンの作品に現れるユダヤ人は放浪癖があり，悪魔的で，極端にセクシャルであり，インディアンとの類似点が多いが，ホーソーンにはユダヤ人への共感はないように思われる。Robert Roulston, "Hawthorne's Attitude Toward Jews," *ATQ*, 29 (1976), 3-8 を参照。